人文科教育研究　23　1996年　pp.39－44

「舞姫」論
――〈母〉を読む可能性――

仁野平　智　明

はじめに

「舞姫」（明治23年１月「國民之友」）は高等学校での教材として，３年生対象に扱われ，主人公太田豊太郎の自我の目覚めの有無についてや，その自我の性質を追究する読みを中心として論じられてきた。また，「弱き心」に起因する非決断の生き方を読み取ることを中心として主人公の心情を理解しようして読まれてきた[1]。これらは確かに，「舞姫」を語る上で不可欠の要素であり，中心であることには違いない。しかし，主人公豊太郎が一人称話者として回想する形でこの作品が成立しており，豊太郎の解釈による世界が描かれていることを考えるに，その背後にあるもの，つまり，豊太郎の無意識までも読み取らなければ，「舞姫」の世界を味わい尽くしたと言えないのではないか。無意識の読み取りが必要とされるのはなにも一人称話者の場合だけでないのはいうまでもないことである。だが，「舞姫」に関しては，回想を「文につづりてみむ」とするわけであるから，作品本文に現れたものが，主人公であり一人称話者である太田豊太郎によって無意識的にも選び取られたものだということを念頭に置かねばなるまい。その中で，本作品中に登場する〈母〉[2]の存在に注目し，豊太郎との繋がりを明らかにするのが，本稿の目的である。

１．

「舞姫」発表後，鷗外が，石田忍月の酷評に対して反論する形で，相沢謙吉の言として発表した「舞姫に就きて気取半之丞に與ふる書」（明治23年４月）の存在はつとに知られるところであるが，その中で豊太郎の〈母〉について次のように述べられている。

> 足下の云く。本二頁下段，余は幼きころより厳重なる家庭の教えを受け云々より以下六十餘行は殆ど無用の文字なり。何如にといふに本篇の主眼は太田其人の履歴にあらずして，恋愛と功名との相関にあればなり。彼が出立の状況，洋行の原因，就学の有様を描きたりとて，本篇に幾千の光彩を増すか。本篇に幾千の関係あるか。予は毫も之が必要を見ざるなりと。……（中略）……次の三行には航西の途を叙したり。これまでにて太田が母の事，明らかに見ゆ。これなくば誰か太田が母の死を聞きて伯林に留まる心を解せむ。

豊太郎の経歴と家庭環境について不必要な叙述であるという批判に対して，豊太郎の親子関係，母の死と豊太郎のベルリン滞在との関係の必然性について反論しているものととることができる。あくまで反論者は相沢謙吉であるが，「舞姫」成立の特殊な背景を考えるに，この作品中の登場人物は，すべて作者の意図により計算されたものということができよう。母ひとり子ひとりという

設定は，当時の家族構成や兄弟数を考えるに，特殊なものと考えるべきである。この豊太郎の親子関係についてはこれまでの論及の中で「弱性の人」を作り出した背景として簡単に済まされることが多かった。

豊太郎自身は，

> 船の横浜を離るるまでは，あつぱれ豪傑と思ひし身も，せきあへぬ涙に手巾をぬらしつるを我ながらあやしと思ひしが，これぞなかなかに我が本性なりける。この心は生まれながらにやありけん，また早く父を失ひて母の手に育てられしによりてや生じけん。」

と述べているが，これを〈語り〉のままに取り，母親一人に育てられたが故に「弱性の人」である，ととらえるだけでは不十分である。母との関係が，豊太郎にとっては唯一の家族との関係なのだ。人は自分の体験から得た価値体系を意識下に置いて様々な欲求を持つ。豊太郎の求める家族というものには母との関係が無関係ではあるまい。母子家庭で育った豊太郎にとっての安らげる家庭とは，母を中心としたものなのである。

エリスの家庭もまた，父の死によって，父性が退けられ，しかもエリスの兄弟姉妹らしき人物も登場しない。「舞姫」における登場人物は実に巧みに精選されたものなのである。そして〈母〉とは，実に重要な存在なのである。

2．

豊太郎の母については諫死と解釈する説がある。長谷川泉氏[3]は，「『舞姫』はあらわには書いていないが，母の自筆書状は，諫死の自殺の書状であろうか」とする。しかし，詳しい論究はなされていない。

十川信介氏[4]は，「長谷川泉氏が指摘するように」とした上で，

> 母の自筆書状とその死を知らせる書状が「殆ど同時に発」せられていること，母が病に臥して居たという情報がないこと，母の書状が「ここに反復するに堪へ」ぬほどの非痛を感じさせたことなどの理由で，母の死が諫死またはそれに近い状態で訪れたことは疑えない。

と述べる。

また，山崎一穎氏[5]は「長谷川泉氏の指摘するごとく『諫死』であろう」とした上で，

> 立身出世と家名を挙げる目的で留学した息子豊太郎を持つ母にとって，息子の免官が官報に出たのを見れば，当然死をもって諫めたと思われる。……(中略)……母がどのような原因で，またどのような状態で死んだのかが一言も書き込まれていないのは，母の死が諫死である事を明瞭に物語っている。

と述べ，諫死である，と断定する。「厳しき庭の教へ」などとあることや，太田家が武家であったらしいことなどから，豊太郎の母が諫死を考える可能性の女性であると憶測することはできる。しかし，「我がまたなく慕ふ母」から自らの行いを諫める手紙を，死をもって諫めたような手紙をもらったと考えると，豊太郎のその後の生活はどう解釈すべきか。女性関係で身を持ち崩したことを諫め，初志を貫徹するよう懇願するような手紙を母からもらっていながら，そのことが契機

となり真実はそれまで「清白」であったエリスとの関係が「離れ難き仲」になったことや，また，相沢からの仕事の紹介があり，エリスが自分の母をうまく説き動かしたとはいえ，母が諌めたとするとその中心であろうその女との同棲生活（母を含めた３人ではあるが）を始めたことは，結び付けて解釈し難いのではないか。「我がまたなく慕ふ母」の諌言を受けながら，あえてその母の憂慮する方向に進み，エリスとの関係の深まりや同棲を導いたと解釈するには無理がある。

草稿では「四十を越えて漸く老いむとする母」となっていたものが発表稿では「五十を越えし母」と変えられたのも，当時の平均寿命を考えて，突然の死を迎えても不自然のない年齢として設定されたためと見るべきであろう。豊太郎は手紙の中に，純粋に我が子の立身出世を願う母の姿を認め，その母の死を知らせる親族からの手紙によりそれが母の最後の手紙であることを知り，「我が生涯にて最も非痛をおぼえさせたる」ものとなったのである。そしてまた，母の死により，豊太郎の経験してきた実の母との家庭生活，安定した場としての家庭は求められなくなったわけである。

３．

注目すべきは，その母を含めたエリスとの同棲を始めてからの豊太郎の姿であろう。「憂きが中にも楽しき月日を送りぬ」とあるように，「カッフェー」でのエリスとの待ち合わせの様子など，実に生き生きとした豊太郎の姿が描かれている。「舞姫」全編にわたって苦悩する姿が描かれる中で，快活な豊太郎の姿はこの部分だけである。エリスに売春を強要したその母の存在さえ，エリスと豊太郎の関係を認めるものとなり，安定した関係になっている。「心の誠をあらはして，助けの綱を我に投げかけしはエリスなりき。かれはいかに母を説き動かしけん，余はかれら親子の家に寄寓することとなり」とあるように，この環境は実際にはエリスの働きかけによって成立したものであるが，その後の豊太郎の生活を見るに，不安定な状態であった豊太郎の心を安定させたものであり，豊太郎自身の心が求めていたものだということができるのではないか。３人で暮らしていた時の豊太郎は伸び伸びと解き放たれた状態にある。精神的に安定したものであることは間違いない。つまり，同棲を始めてからしばらくの豊太郎は，苦悩から解放された安定した状況にあったということができる。

これは，豊太郎における〈家庭〉，〈母〉の問題と深く関わる。前述の通り，母子関係が，豊太郎にとっては唯一の家族との関係である。実の母を失った豊太郎は，安らげる場として，無意識のうちに母性を中心とした環境を求めたのである。その母性とはエリスの母と，そしてエリスである。エリスの母については，自分の存在を否定しないだけでその意味は十分であろう。問題は，母性としてのエリスである。

一般に，エリスと豊太郎の関係については，出会いから作品前半までの関係，そして豊太郎自身の「師弟の交はり」という言葉を大きくとらえ，庇護者としての豊太郎という形で論じられる場合が多い。また，豊太郎の自我に光が当てられるため，関係として述べられることが少なくもある。しかし，初めに述べたように，この作品は主人公豊太郎の回想という，モノローグによっ

て成立しているものであるため，豊太郎が自覚的でないもの，作品から読み取れる豊太郎の〈無意識〉を明らかにする必要がある。その点から見れば，免官になってからというもの，２人の関係は，エリス主導になったといえる。前述の同棲の件をはじめとして生活を中心とした事柄についてはエリスには迷いがない。自立した主体として様々なことに対処する。相沢に会ってからエリスとの関係で様々に迷う豊太郎を，母性として受け入れ，自己を常に豊太郎との関係の中でとらえている。そして，母親さながらの姿を見せるようになり，豊太郎自身も，次のように述懐している。(傍点筆者)

> かはゆき一人子を出しやる母もかくは心を用ゐじ。大臣にまみえもやせんと思へばならん，エリスは病をつとめて立ち，上襦袢もきはめて白きを選び，丁寧にしまひおきしゲーロックといふ二列ボタンの服を出して着せ，襟飾りさへ余がために手づから結びつ。

しかし，エリスは豊太郎の母となることはできず，豊太郎の子の母となる。妊娠については，「さらぬだにおぼつかなきは我が身の行く末なるに，もしまことなりせば，いかにせまし」という不安な心情が示されているが，この事態はまた，エリスが自分の母とはなり得ないということを突き付けられた豊太郎の無意識の不安を呼び起こすことになっているということができよう。妊娠がはっきりしてから，〈家庭〉は豊太郎にとって安住の場でなくなるのである。

4.

人間関係を形成する原理について，河合隼雄氏[6]は，〈母性原理〉と〈父性原理〉という語を用いて説明している。氏によれば，母性原理とは「我が子は良い子」であり，父性原理とは「良い子は我が子」ということである。これはそのまま豊太郎を取り巻く人間関係に当てはめて考えることができよう。エリスは母性原理に従って豊太郎をとらえる。豊太郎の言動である限り，信じ続ける。その理由を敢えて問うならば「豊太郎だから」ということになろう。だからこそ信じ切れなくなった時，つまり，豊太郎が病で人事不省の状態にあった時に相沢から真実を聞き，大きなリバウンドとなって返って来るしかなかったのである。自らを保てずに狂人となるより仕方がなかったのである。

一方，相沢謙吉や天方伯は，父性原理において豊太郎をとらえている。相沢は友として豊太郎を全面的に受け入れているかのようであるが，自分の論理に従った豊太郎を我が側の人物としてそして友と認める。天方伯においては更に明確である。翻訳を約束通り果たし，ロシアへの随行役を見事果たしたことを評価し，我が側の人物として認める。

無意識のうちに母性を求め安定を求める豊太郎は，エリスに母性を求めていった。母性原理はなにも女性にのみ存在するわけではないが，彼女はそれを許してくれる性情の女性であったといえる。しかし，その安定した場がエリスの妊娠によって失われるとともに，日本におけるかつての地位を奪回する野心を持つことで，豊太郎は父性原理の支配する社会へ身を投じて行くのである。自らの実力を評価され日本への帰国と名誉挽回の機会を手にすることとなる。だが，これらは豊太郎の明確な決意の元に行われているものではなく，母性を求める思いは一気に払拭された

わけではない。意志とは無関係にいつまでも求めている。それが非決断に継ぐ非決断により，もはや安定した家庭として求めることができない段に至り，そこから放擲され，ようやく自立への一歩を踏み出すのである。

5．

一般に文学作品とは，それだけで世界が成立しているもので，発表された時点から作者からは離れて存在するといえよう。作者の姿を常に投影して読むべきものではないであろう。しかし，この「舞姫」は特別の成立背景を持つ作品であり，作者との対照が作品解釈に深く関わるものであるといえる。

鷗外は明治22年３月に赤松登志子と結婚，翌年１月「舞姫」を発表，10月には離婚が成立している。家風の違いをはじめとしてその破局の真相については様々な詮索がなされるところであるが，それについての明確な記述も日記には見当たらず，近親者も語ることをしない。鷗外の登志子への気遣いであろうか。いずれにせよ重要なのは，結婚１年も経たないうちに一読して自らがモデルであると分かるような小説をわざわざ発表しているという点である。しっくりと行かない登志子との仲を憂慮する思いよりも勝る思いでこの作品が発表された以上，自らをモデルとする主人公の人物造形に明らかな意図を読み取ることができる。鷗外自身との相違点についても同様である。

医学と法学という学問分野の相違については，ドイツで法学や哲学を学んだ，媒酌人であり赤松家の外縁となる西周に対する挑戦と解すべきか，鷗外自身の法学に対する思いなのか，またそれ以外の何等かの意図によるものなのかは決し難いが，何等かの意図があるといえる。本来明らかにすべき事柄ではあるが，本稿の目的と直接的には関わらないため，ここでは割愛する。

豊太郎の親子関係と森鷗外自身のそれは明確に異なる。鷗外は明治５年６月に，11歳で父に連れられて学問のため故郷の津和野を出て上京している。そののち一家はみな上京してくることにはなるのだが，結び付きとして強いのは父との関係である。父と同じ医学の道を志し，ドイツに留学しているのは周知の事実である。これに対し豊太郎は，幼くして父親と死別し，母ひとり子ひとりで育っている。実感される親子関係は母子関係だけであるといってよい。豊太郎とその母との関係は，作者によって意図的に強められたものなのである。豊太郎の母は，慎重に配され，慎重に除かれ，慎重に残された存在なのである。

まとめ

「舞姫」において豊太郎の母は，その死によって，豊太郎の母性に対する思いを封じ込める形で固定化したといえる。自らを受け入れてくれる母を恋い慕う心を強化し，それをエリスに求めていった。はじめ彼女はそれを満たしてくれたものの，豊太郎の子を身籠ることにより，その役は果たせなくなってしまう。〈家庭〉が安住の場でなくなった豊太郎は，父性原理により評価される場を求めて行く。

エリスを踏み台にすることで，豊太郎に深く影を落としていた母の存在を客体化し，ここにおいて始めて自我の確立の一歩を踏み出すことができたといえる。親を客体化することが青年として一人立ちする必要条件であることはだれもが認めることであろう。母子家庭で育った一人子豊太郎における母の存在の大きさ，また，その関係が変化をもたらす前に，母の死という偶然により固定化されたことを考えるに，母恋いの大きな思いは容易に読み取れよう。

「舞姫」は，母恋いの物語であるとともに，母離れの自立の物語でもあるのである。

〈注〉

（1） 磯貝英夫「『舞姫』論―目的と北斗―」（『別冊国文学№37　森鷗外必携』平成元年10月　学燈社）p. 12～13

（2） 本論において〈母〉とするのは，単に肉親として，家族内役割としての母親のみでなく，「母性」を示している。

（3） 長谷川泉『森鷗外論考』（昭和37年11月　明治書院）p. 272

（4） 十川信介「太田豊太郎の憂鬱―うしろめたさについて―」（「文学」第40巻第11号　昭和47年11月）p. 40

（5） 山崎一穎『Spirit 森鷗外　作家と作品』（昭和60年６月　有精堂）p. 123

（6） 河合隼雄氏は，『母性社会日本の病理』（昭和60年９月　中央公論社　p. 9～10）の中で「母性の原理は「包含する」機能によって示される。それはすべてのものを良きにつけ悪しきにつけ包みこんでしまい，そこではすべてのものが絶対的な平等性をもつ。「わが子であるかぎり」すべて平等に可愛いのであり，……これに対して父性原理は「切断する」機能にその特性を示す。それはすべてのものを切断し分割する。主体と客体，前と悪，上と下などに分類し，母性がすべての子供を平等に扱うのに対して，子供をその能力や個性に応じて類別する。」としている。